



胆沢地方の民話の収集者

織田秀雄

織田秀雄は、胆沢郡に伝わる民話を聞き書きし、活字として最初に紹介した人物である。有名な作品には「大工と鬼六」がある。このお話に出てくる「鬼六」は、心が優しく、約束をきちんと守れる鬼として親しまれている。絵本として出版されたり、教科書の教材として取り上げられており、全国に広く知られている。

織田秀雄は、一九〇八年（明治四十一年）胆沢郡小山村字笹森（現・胆沢区小山）に父慶助、母イロの長男として誕生した。秀雄が生まれて間もなく両親の仕事の関係で、胆沢郡金ヶ崎村（現・金ヶ崎町）に移住した。そのころのことを秀雄はこう書いている。「その頃、私の父は線路工夫であった。先年、私が線路工夫の唄をつくって、少しはやらしたのも、偶然だとは言えない。母は踏み切り小屋の番人であった。汽車が通る度、木戸をギイバタリと下ろして、白い旗を神妙にふるのです。

私は幼年期をほとんどここで暮らした。駒下駄を両手に持って、

秋の中の冷え冷えしたレールを軽業師のように渡って歩いた。私は小豆ばかり食った少女のように青く痩せた、しなしなの子どもであった。私は泣き虫で、どこかの姉さんや伯母さんをさんざんてこずらしたが、明るく激しく笑う少年でもあった。」（『十月雑記』）

一九一五年（大正四年）秀雄は金ヶ崎尋常高等小学校（現・金ヶ崎小学校）に入学する。頭のいい子どもで、体操と手工（図工）は苦手だったが、二年生のときは全甲（すべての教科が最高）になる。

生活は苦しく、秀雄が三年生の時に父母は小山村にもどり、農家の仕事をするようになる。小山尋常高等小学校（現・胆沢第一小学校）でも成績がよく五年生、六年生とも全甲であった。六年生の中には織田一風のペンネームで俳句を作るなど大人びた少年でもあった。

一九二三年（大正十二年）県立水沢農学校（現・水沢農業高校）に進学する。秀雄は、軍事訓練に反対したり、テストの白紙提出をしたりした。また、弁論部に所属し、胆沢郡内の村々をめぐり、新しい社会をつくるべきことを主張した。

一九二六年（大正十五年）、水沢農学校を卒業した秀雄は、五月から姉体尋常高等小学校（現・奥州市立姉体小学校）の代用教員に

なる。教師としての秀雄は常に生徒のことを考え、生徒の自主性や自立を学ばせる手段として共同学習をおこなったり、掃除点検を生徒週番にさせたりするなど、独特の指導を行った。中でも「読み方」の授業は、ほんのわずかの間に胆沢郡内外で評判になり、あちこちから授業参観の教師が姉体小学校を訪れた。また、このころから民謡や昔話などの収集を開始。その中には「麦つき節」もあった。

一九二七年（昭和二年）、十九歳のときに真城尋常高等小学校（現・奥州市立真城小学校）の訓導（正教員）になる。ここでも秀雄は教育に情熱を燃やした。姉体小学校時代から評判の高かった「つづり方」や「読み方」の授業を参観に来る教師がますます増えた。あまりに増えるので、生徒たちが落ち着いて授業を受けたり、自分の思ったことを言えなかったりするのです。参観に来た教師に「後ろに立っているのは目ざわりです。静かに座ってみてください。」と言ったこともあった。

学芸会の時は「マリと殿様」「しかられて」などの童謡を、自分の振り付けで踊ったり、自作の作品を教材として使用したりすることもあった。

また、秀雄の生涯の中で創作活動や投稿がもっとも多かったのが真城小学校時代であった。農学校同窓会紙「胆農」に二十三、岩手

日報に五十、『赤い鳥』への投稿で活字になったもの四、短歌誌『牧草』に四、岩手毎日新聞に十八、自ら主宰した『天邪鬼』に十九など、わずか二年九カ月の間に百五十を越す作品を発表した。『天邪鬼』には「ヤロコ詩」（ヤロコとは童子・子どものこと）などを集めては発表し続けた。これらの詩には、笑いこけて、子どもたちと共にはやし立てて喜んでいる姿が見えるようなものが多数ある。『天邪鬼第三号』には、壮次ぢいの語った話として「大工と鬼六」が発表された。秀雄が子どもたちと一緒に地域の人たちに聞き歩いて集めた民謡や民謡は「童子の聞いた話」「胆沢郡昔噺集」「胆沢民謡研究」「岩手童言集」などにまとめられて残っている。

昭和五年（一九三〇）、二十二歳で、真城尋常高等小学校を退職し、上京した。当時は政治、経済の不安から、人々の生活が苦しい時代であった。そして民衆の団結が強まる中で、取締りや弾圧が強くなってきた時代でもあった。秀雄も真城小学校に勤務していた時、警察官が来て留置場に入れられたこともあった（すぐに釈放された）。情熱家の秀雄は、そうした時代の流れを見て、自分の生きる新しい道を探そうとしていたのであった。

東京に出た秀雄は、新興教育所創立に参加し、小説を書いたり、さらに、仙台に移って新聞記者として働きながら何とか生活を支え

ていた。

こうした貧しい生活の中で一九四〇年（昭和十五年）、三十一歳で結婚し、翌年には長男も生まれたが、生後三カ月で病死。秀雄自身も病気になる、一九四二年（昭和十七年）十二月、なんとか水沢に帰えるが、小山にある生家せいかに歩いて行けないほど弱せいかっていて、そのまま胆沢病院に入院。治療は受けたものの、極度の衰弱すいじやくと病氣悪化のため二日後に亡くなった。死因しゐんは肺結核はいけつかく。秀雄は三十四歳の短い生涯しやうがいを終えた。秀雄は、現在は胆沢区小山の墓に眠っている。

二〇〇八年（平成二十年）、小山地区・笹森地内の秀雄の生家の近くに、彼の詩「百姓人形」の詩碑が建立された。

#### \*参考文献

『胆沢・江刺の先人物語』

『人間 織田 秀雄』



真城小学校教員（松の木を背に立つ秀雄）